

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

我が家のお守り

徳島県 小松島市立小松島中学校 一学年

下川 あさひ

父が病気で入院したのは、今から八年前のことです。C型肝炎という肝臓の病気でした。肝臓は沈もくの臓器といわれているようで、なかなか自覚症状が出てこない上に、C型肝炎は、放っておくと肝硬変や肝臓ガンへと重症化していくそうです。父は定期検査でこの病気であることが発覚しました。どんどんひどくなる前にと入院を決意し、三週間ほど仕事を休みました。その頃私はまだ五歳、妹は三歳でした。母は、父が元気になって仕事復帰できるか、すごく不安だったそうです。そんな時、金銭的な支えになってくれたのが生命保険でした。父が就職した年から入っていた保険のおかげで、安心して治りように専念することができました。

“生命保険”、その言葉は聞いたことがあっても、実際どんなものなのかは分かりませんでした。私たちの暮らしの中には、一家の働き手が亡くなったり、家族の誰かが病気になったりするなど、いつもの暮らしをおびやかす危険がたくさん潜んでいます。それらの危険が万が一現実となった時、役に立つのが生命保険であり、それは私たちが安心して生活していくための大切な備えであると言えます。現代では、約二秒に一人が病気やケガで新たに入院しているらしく、そんなこともあってか、生命保険には十世帯あたり約九世帯が加入しているそうです。

私と妹が生まれた時にも、両親が“学資準備のための保険”に加入してくれました。この学資準備のための保険とは、進学する時の学資金として備えるものですが、万が一契約者である母が死亡した場合、その後の保険料を払いこまなくても学資金を受け取れることになっていきます。また、私がケガや病気で入院した時の医りよう保障も受けられるそうです。

母も子どもの頃、祖母が学資準備のための保険に加入してくれていたと聞きました。その後就職してからも、保険はお守りだからと、生命保険への加入を勧めてくれたそうです。今のところ母は大きな病気をすることもなく元気に過ごしていますが、誰しもがいつどんなケガや病気になるかわかりません。本当に保険は大事なお守りだ

第55回中学生作文コンクール

など思います。
今回父や母に話を聞いて、今まで自分には関係のないものだと思っていた保険が、実はとても身近なものなんだと感じました。私も就職したら生命保険に自分で加入し、自分の子どもにも学資準備のため保険をかけ、両親からのお守りを受け継いでいきたいと思えます。